

孤独感および孤独に対する捉え方が友人関係に及ぼす影響

清水健司（信州大学 人文学部）

清水寿代（広島大学大学院教育学研究科）

川邊浩史（西九州大学短期大学部 幼児保育学科）

キーワード：孤独感, 孤独に対する捉え方, 友人関係

The influences of loneliness feeling and how to grasp solitude on friendships

Kenji Shimizu(Shinshu University)

Hisayo Shimizu(Hiroshima University)

Hirofumi Kawabe(Nishikyushu University Junior College)

Key words: loneliness feeling, how to grasp solitude, friendship

【問題】

“孤独感”とは、青年期の宿命とも言える特徴的かつ代表的な生活感情である。この時期に直面する発達課題は“自分さがし”であり、そのために日常生活の様々な場面で「自分が一人であること」を痛感させられる瞬間は決して少なくない。また孤独を感じる場面では、形容しがたい寂寥感や心理的苦痛が随伴されるため、一般的にはネガティブな印象を持って受け止められることが多い感情である。実証研究においても、孤独感は自尊感情と負の関連を示し、抑うつとは正の関連が示されているように（大東・岩元，2009），精神的健康を悪化させる要因としての意味合いが強い。

Peplau & Perlman（1979）によると，“孤独感”は「個人が現実に経験している社会的関係が、当人がもちたいと望んでいる関係に比べて、下回ったり不満であると認知されるときに生じる不快な感情」と定義されている。これは青年個人を取り巻く様々な対人関係において、現実水準（実際に認知されている関係性）が理想水準（こうありたいと願う関係性）に追いつかないケースで孤独感が生起することを示したものである。また、この現実水準と理想水準の乖離は、実際の孤独感の大きさにも影響力を持つことが予想される。特に青年期は、自分の自信や優越感といった自己の肯定的感覚を何とか維持したいという自己愛傾向（小塩，2004）が高まる時期でもあるため、理想水準は無意図的に高いレベルに設定され、逆に現実水準は実際よりも低く見積られる可能性がある。こう考えると、青年期は孤独感を身近かつ

慢性的に経験せざるを得ない時期であるとも言える。

このように「青年期における苦痛」として記述されることの多い孤独感ではあるが、一方では個人が自己存在について深い洞察を得るために必要な感情とのポジティブな性質を指摘するものもある。Moustakas (1961, 飯鉢訳 1977) では「孤独は、人に人間性を保持させ、広げさせ、深めさせる、人間たる経験である」と形容されている。このように、青年期の孤独感を研究主題とする際には、感情から派生される心理的苦痛という側面に加え、「一人であることをかみしめる経験」によってパーソナリティの成熟に至るといった、ネガティブとポジティブの両側面から捉える必要があると言えるだろう。

また落合 (1999) では、孤独感は「自分が一人であると感じること」と簡潔に定義されており、孤独感を類型論的視点から捉えている。落合 (1999) によると青年期の孤独感は、対他次元 (現実に関わっている人と理解・共感できると考えている要因) と対自的次元 (個別性 (自分と他人は代わることができない存在であること) に気づいている要因) の2次元軸から構成され、その組み合わせによってA～D型の4類型に判別できるとされている。特に青年期では孤独感類型のA型 (対他次元がHigh群で、対自的次元がLow群であるケース) からD型 (対他次元がHigh群で、対自的次元もHigh群であるケース) への発達の移行が想定されている。伊藤 (1995) においては、思春期の課題とされる親密な友人関係を獲得した後、その関係のなかに埋没 (A型) してしまうのではなく、人間の個別性、つまり実存的な孤独感に気づくことが成熟したパーソナリティ (D型) に必要であることが指摘されている。また、清水 (2001) でも、A型よりも成熟の色合いが濃いとされるD型において、より強い対人恐怖心性 (健全青年に見られる過度の気遣い、対人緊張の強さ) を持っていることが報告されている。単純に考えると成熟によって対人緊張は抑制されると思いがちだが、実際には逆で、成熟によって対人緊張は微弱ながらも強くなってゆくようである。これは、対自的次元と対他次元の狭間における“健康な内閉状態”のなかで、対人緊張に苦しみながらも自己実現へと邁進する姿であると解釈されている。このように孤独感の実証研究のなかには、類型論的視点から捉えることによってネガティブ・ポジティブの両側面を加味しようとするものもある。

そして大東・岩元 (2009) は、個人における孤独感の程度だけではなく、孤独という事象を個人がどう捉えるかの認知的側面についても検討を加えている。大東・岩元 (2009) では、孤独に対して否定的な捉え方をする「否定的評価」、孤独を自己成長に資するものと捉える「自己成長機能」、孤独に対して肯定的な捉え方をする「肯定的評価」の3下位尺度からなる、孤独に対する捉え方尺度が開発されている。またクラスター分析によって、自我同一性の達成度が最も高いのは、孤独を否定的に評価するのではなく肯定的に捉えようとしているグループであったことが報告されている。これは、孤独の捉え方におけるネガティブもしくはポジティブな側面、加えて成長への触媒であるとの3側面を明確に設定した実証研究である。

さて、青年期は子どもから大人への移行期でもあるため、両親や大人に対して反発感情が生じたり (第二反抗期)、一定の心理的距離を取り始めるようになる (心理的離乳)。そして、入れ替わるようにして自分と年齢の近い友人との心理的距離に重心を置き始め、安定した心理・社会的発達に必要な「親密な友人関係」を構築してゆくのである (清水・川邊・海塚, 2005)。このように、親・大人との結びつきが相対的に弱体化してゆくのに対し、同年代の

友人との関係性を強化してゆくことで自己存在の証明を補完しつつ、“自分らしさ”を模索してゆくことになる。これは第2の分離個体化過程における重要な主題であり、この関係性のスムーズな移行は青年たちの精神的健康にも大きな意味を持つものである。しかし、たとえ“自分という存在を友人に認めて欲しい”と強く願ったとしても、現実的にこの欲求は常時満たされるとは限らない。そのため、認められたいが叶わない葛藤のもとで、孤独感は慢性的に生じることになる。このような友人関係のあり方から派生する孤独感は、時として強い心理的苦痛を付随させるため、青年たちの心を追いつめかねない性質を持っている。しかも、孤独感は青年期の日常生活そのものに根差した感情であるため、低減することは決して容易ではない。ただし、孤独は自分を責め立てるネガティブな性質だけではなく、ポジティブな性質も持ち合わせていることを踏まえると、孤独という事象を自分の成長に必要なものと捉えるか、自己嫌悪を深めるものと捉えるかの認識の違いは、青年の様々な心理的要因に少なからず影響を及ぼすことが予想される。それは、彼らの発達課題“自我同一性の確立”において重要な役割を担っている、友人関係のあり方においても同様であるだろう。

そこで本研究は、孤独感における量的視点および質的視点を含めて検討するため、孤独感(孤独感そのものの強度)および孤独に対する捉え方(肯定的な捉え方か、否定的な捉え方)の2次元軸を想定した場合に、青年における友人関係のあり方(どのような友人関係を構築しているのか、友人関係におけるストレス量をどのくらい感じているのか)にどう作用するのかを明らかにしてゆく。

【方法】

調査参加者：A県内の大学生232名(男性：118名、女性：114名 平均年齢19.3歳 $SD=1.74$ 歳)を対象に、集団法・無記名で質問紙調査を実施した。

改訂 UCLA 孤独感尺度：Russel, Peplau, & Cutrona (1980)による改訂 UCLA 孤独感尺度の邦訳版(諸井, 1992)を用いた(以下、孤独感尺度)。全20項目のうち、因子負荷量が高い値を示した10項目(ex. 私は、他の人たちから孤立している)を選定して調査に用いた。全10項目について「けっして感じない(1)」～「たびたび感じる(4)」の4件法で評定を求めた。

孤独に対する捉え方尺度：大東・岩元(2009)による孤独に対する捉え方尺度を用いた。そして、孤独を否定的な立場において捉える「否定的評価」に該当する13項目のうち因子負荷量が高い値を示した8項目と、孤独のなかに肯定的な側面を見出そうとする「肯定的評価」の5項目を用いた。全13項目について「全くそう思わない(1)」～「非常にそう思う(7)」の7件法で評定を求めた。

友人関係尺度：岡田(2010)による友人関係尺度を用いた。本尺度は、友人関係の深さ-浅さの次元に言及する「表面的-内面的関係」(ex. 友達に悩みごとを相談する)と、1人になることを回避するために集団を形成する「群れ」(ex. 仲間から「つまらない人間」と思われぬように気をつける)と、友人との距離感に神経を使う「気遣い」(ex. 仲間関係の中で互いに傷つけないよう気をつかう)の3下位尺度から構成されている。本研究においてもこの3下位尺度を使用し、全15項目について「全くあてはまらない(1)」～「非常にあてはまる(6)」の6件法で評定を求めた。

対人ストレス尺度：橋本（2005）による友人との摩擦的な出来事を測定する対人ストレス尺度を用いた（本研究では、対象を「友人」に限定）。本尺度は、友人に主張しなかったことを我慢した経験を表す「対人摩擦」（ex. あなたのあからさまな本音や悪い部分が出ないように気を使った）と、自分の責任によって友人に迷惑をかけた経験を表す「対人過失」（ex. 友人に対して果たすべき責任を、あなたが十分に果たせなかった）と、友人から軽視されたような経験を表す「対人葛藤」（ex. 友人からけなされたり、軽蔑された）の3下位尺度から構成されている。本研究においてもこの3下位尺度を使用し、全18項目について、最近1ヶ月のあいだに各々の出来事がどのくらいあったかを「全くなかった(1)」～「しばしばあった(4)」の4件法で評定を求めた。

【結果】

因子分析、基礎統計量の算出および各指標間の相関係数

まず孤独感尺度では、フロア効果の見られた3項目を除外し、残った7項目について因子分析（最尤法）を行った。固有値の減衰状況から1因子パターンが妥当であると判断され、説明率は68.2%を示していた。なお孤独感尺度は、得点が高くなるほど孤独感が強くなるように得点化した。次に孤独に対する捉え方尺度では、フロア効果の見られた1項目を除外し、残った12項目について因子分析（最尤法）を行った。固有値の減衰状況から1因子パターンが妥当だと判断され（説明率は61.4%）、孤独に対する捉え方は一次元上で表すことも可能であることが示唆された（Table1）。なお、孤独に対する捉え方尺度は、得点が高くなるほど孤独を肯定的に捉え、得点が低くなるほど孤独を否定的に捉えているように得点化した。

Table1 孤独に対する捉え方尺度の因子分析結果（最尤法）

No.	項目	因子負荷量
11	孤独はつらいものだ	.93
6	孤独はかなしいものだ	.92
10	孤独は苦しいものだ	.90
13	孤独はさみしいものだ	.88
2	孤独は切ないものだ	.86
1	孤独は気持ちを落ち込ませるものだ	.84
7	孤独は人を不安にさせるものだ	.80
4	孤独はこわいものだ	.77
12	孤独は好きだ	-.67
3	孤独は楽しい	-.60
9	孤独は落ちつくものだ	-.57
8	孤独は楽だ	-.51
累積説明率		61.42

そして、友人関係尺度についても因子分析（最尤法-Promax 回転）を行った。その結果、固有値の減衰状況から3因子パターンが妥当だと判断された。第1因子は友人と真剣に議論

をしたり、お互いに内面を見せ合う「開示的なつきあい」、第2因子は友人の反応をつぶさに伺いながら集団を維持する「群れ」、第3因子は友人に合せながら行動してゆく「気遣い」となっていた（累積説明率は42.7%）。最後に、対人ストレス尺度についても因子分析（最尤法-Promax 回転）を行った。その結果、固有値の減衰状況から橋本（2005）と同様に「対人摩耗」、「対人過失」、「対人葛藤」の3因子パターンが妥当であると判断された（累積説明率は53.6%）。

Table2 に、各測定尺度得点における基礎統計量（ $M \cdot SD \cdot \alpha$ 係数）と各指標間における相関係数を示した。孤独感と孤独に対する捉え方の相関係数はほぼ無相関（ $r=.14$ ）であり、お互いに独立した関係にあることが示唆された。したがって、本研究では孤独感と孤独に対する捉え方は直交する2次元軸として想定することとした。また、孤独感と友人関係尺度の3下位尺度と一貫して負の相関を示し、対人ストレスの対人摩耗（ $r=.19$ ）および対人葛藤（ $r=.35$ ）とは正の相関を示していた。そして、孤独に対する捉え方は友人関係尺度の3下位尺度と一貫して負の相関を示しており、対人ストレスの対人摩耗（ $r=-.18$ ）および対人過失（ $r=-.23$ ）とは負の相関を示していた。

Table2 各変数の相関係数および基礎統計量

	孤独感	孤独に 対する 捉え方	開示的 なつき あい	群れ	気遣い	対人摩 耗	対人過 失	対人葛 藤	M	SD	α 係数
孤独感									12.35	4.28	.93
孤独に対する捉え方	.14*								46.20	15.77	.71
開示的なつきあい	-.39*	-.13*							18.95	4.63	.78
群れ	-.39*	-.34*	.19*						19.65	4.25	.77
気遣い	-.13*	-.31*	.05	.45*					19.22	3.37	.67
対人摩耗	.19*	-.18*	-.25*	.15*	.37*				15.42	4.30	.87
対人過失	.12	-.23*	-.04	.24*	.21*	.58*			11.47	3.32	.84
対人葛藤	.35*	-.05	-.13	.02	.02	.50*	.55*		7.53	2.47	.77

* $p < .05$

孤独感と孤独に対する捉え方が友人関係のあり方に及ぼす影響

独立変数を、孤独感による主効果項（センタリング処理を実施…Step1 に投入）、孤独に対する捉え方による主効果項（センタリング処理を実施…Step2 に投入）、孤独感×孤独に対する捉え方の交互作用項（互いの主効果項の積…Step3 に投入）とし、従属変数を友人関係（開示的なつきあい、群れ、気遣い）と対人ストレス（対人摩耗、対人過失、対人葛藤）とした階層的重回帰分析を行った。Table3 に友人関係尺度の3下位尺度を従属変数とした場合の結果を示し、Table4 に対人ストレス尺度の3下位尺度を従属変数とした場合の結果を示した。

まず友人関係における「開示的なつきあい」では、孤独感に有意な主効果が示されていた（ $B=-.411, p<.05, R^2=.141$ ）。また「群れ」では、孤独に対する捉え方（ $B=-.075, p<.05, R^2=.118$ ）および孤独感（ $B=-.341, p<.05, R^2=.118$ ）に有意な主効果が示されていた。さらに

「気遣い」では、孤独に対する捉え方 ($B=-.059, p<.05, R^2=.096$) に有意な主効果が見られ、その交互作用 ($B=-.004, p<.10, R^2=.010$) は有意傾向を示していた (Table3)。

Table3 孤独感と孤独に対する捉え方が友人関係に及ぼす影響

			開示的なつきあい	
投入変数			回帰係数	R ² 変化量
Step 1: A	孤独に対する捉え方		-.025	.018
Step 2: B	孤独感		-.411 *	.141 *
Step 3: A × B	孤独感 × 孤独に対する捉え方		.001	.000
切片			18.942	
* $p < .05 + p < .10$				
			群れ	
投入変数			回帰係数	R ² 変化量
Step 1: A	孤独に対する捉え方		-.075 *	.118 *
Step 2: B	孤独感		-.341 *	.118 *
Step 3: A × B	孤独感 × 孤独に対する捉え方		-.005	.007
切片			19.694	
* $p < .05 + p < .10$				
			気遣い	
投入変数			回帰係数	R ² 変化量
Step 1: A	孤独に対する捉え方		-.059 *	.096 *
Step 2: B	孤独感		-.071	.008
Step 3: A × B	孤独感 × 孤独に対する捉え方		-.004 +	.010 +
切片			19.260	
* $p < .05 + p < .10$				

Table4 孤独感と孤独に対する捉え方が対人ストレスに及ぼす影響

		対人摩耗	
投入変数		回帰係数	R ² 変化量
Step 1: A	孤独に対する捉え方	-.052 *	.034 *
Step 2: B	孤独感	.224 *	.048 *
Step 3: A × B	孤独感 × 孤独に対する捉え方	-.006 +	.014 +
切片		15.477	
* p < .05 + p < .10			
		対人過失	
投入変数		回帰係数	R ² 変化量
Step 1: A	孤独に対する捉え方	-.047 *	.054 *
Step 2: B	孤独感	.121 *	.022 *
Step 3: A × B	孤独感 × 孤独に対する捉え方	-.007 *	.029 *
切片		11.532	
* p < .05 + p < .10			
		対人葛藤	
投入変数		回帰係数	R ² 変化量
Step 1: A	孤独に対する捉え方	-.011	.002
Step 2: B	孤独感	.214 *	.132 *
Step 3: A × B	孤独感 × 孤独に対する捉え方	-.004 *	.016 *
切片		7.562	
* p < .05 + p < .10			

そして対人ストレスにおける「対人摩耗」では、孤独に対する捉え方 ($B=-.052, p<.05, R^2=.034$) および孤独感 ($B=.224, p<.05, R^2=.048$) に有意な主効果が示されており、交互作用 ($B=-.006, p<.10, R^2=.014$) は有意傾向を示していた。また「対人過失」では、孤独に対する捉え方 ($B=-.047, p<.05, R^2=.054$) および孤独感 ($B=.121, p<.05, R^2=.022$) の主効果と交互作用 ($B=-.007, p<.05, R^2=.029$) が有意であった。そして「対人葛藤」では、孤独感 ($B=.214, p<.05, R^2=.132$) に有意な主効果と交互作用 ($B=-.004, p<.05, R^2=.016$) が有意であった。交互作用が有意もしくは有意傾向であった従属変数については、回帰式をもとに孤独感および孤独に対する捉え方が $-1 SD, Mean, +1 SD$ の値を取った場合の予測値を単回帰直

線によって示した (Figure1 ~ 4)。

まず友人関係における「気遣い」では、孤独感が強い場合 (+1SD) であっても孤独に対する捉え方が肯定的 (+1SD) であれば、他者の顔をうかがうような関係性は持たなくなること ($B=-.36$ $t=4.85$ $p<.05$) が示されていた (Figure1)。また、対人ストレスにおける「対人摩耗」では、孤独感が強い場合 (+1SD) であっても孤独に対する捉え方が肯定的 (+1SD) であれば、自分の本音を隠して友人とつき合うことで感じる心理的な負担は軽減されること ($B=-.29$ $t=3.84$ $p<.05$) が示された (Figure2)。また「対人過失」においても、孤独感が強い場合 (+1SD) であっても孤独に対する捉え方が肯定的 (+1SD) であれば、友人の期待に応えられないことで感じる心理的な負担が軽減されること ($B=-.36$ $t=4.84$ $p<.05$) が示された (Figure3)。そして「対人葛藤」においても、孤独感が強い場合 (+1SD) であっても孤独に対する捉え方が肯定的 (+1SD) であれば、友人から軽く扱われることによる心理的な負担は軽減される可能性 ($B=-.15$ $t=2.45$ $p<.05$) が示された (Figure4)。

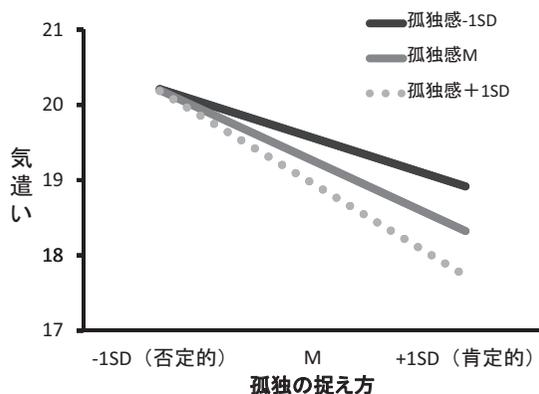


Figure1. 孤独感と孤独に対する捉え方が気遣いに及ぼす影響

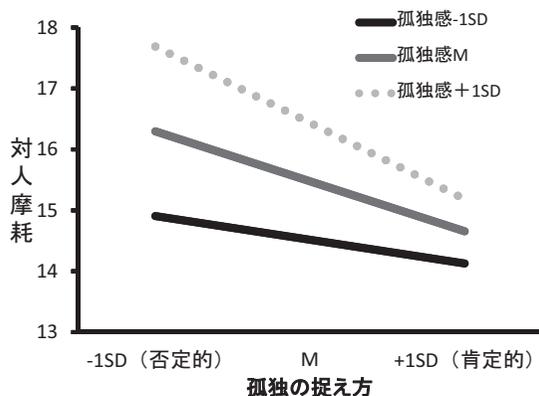


Figure2. 孤独感と孤独に対する捉え方が対人摩耗に及ぼす影響

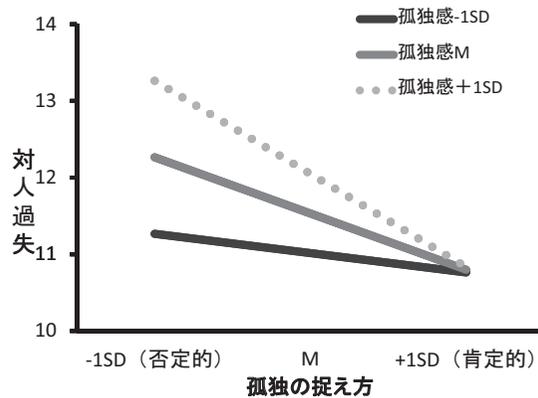


Figure3. 孤独感と孤独の捉え方が対人過失に及ぼす影響

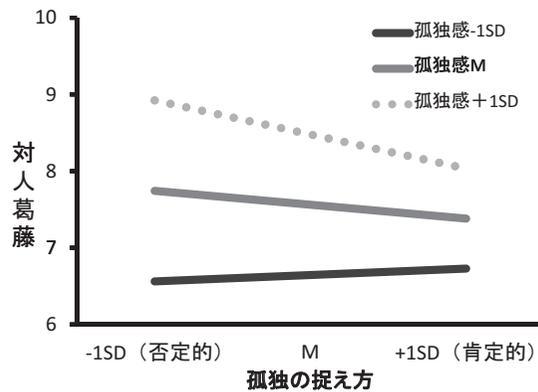


Figure4. 孤独感と孤独の捉え方が対人葛藤に及ぼす影響

このように、たとえ孤独感が高くとも孤独のなかに肯定的な視点を持つことが出来るのであれば、友人関係で必要以上に委縮することもなく、友人との摩擦や自分が友人に迷惑をかけているとの対人的軋轢が少なく抑えられることが示されていた。

【考察】

本研究は、孤独感と孤独に対する捉え方が、友人との関係性にどう作用するのかを検証したものである。これは、仮に同程度の孤独感に苛まれていても、孤独という現象の捉え方が否定的か肯定的かという認識の違いによって、青年期における重要資源としての友人関係のあり方に変化が生ずるのではないかという問題意識に基づくものである。

階層的重回帰分析の結果、まず友人関係における「開示的なつきあい」では、孤独感を強く意識している個人ほど友人関係が表面的なものになりやすく、自分の本音を開示する機会が少なくなることが示されていた。また「群れ」においては、孤独感を強く意識している個人もしくは孤独のなかに肯定的側面を見出そうとする個人ほど、友人に追従しようとする意思が薄れるためか集団行動に対する動機の低下が示されていた。そして「気遣い」において

は、孤独感と孤独に対する捉え方の交互作用が有意傾向を示しており、同じように強く孤独感を意識している個人であっても、孤独を否定的に評価する場合よりも肯定的に評価する場合のほうが、友人関係のなかに自己を埋没させない関係性を志向している可能性が見て取れた。このように、孤独感の強さは自分の悩みを他者に打ち明けないことや、集団を成して群れるような機会の少なさに関連しており、自分自身の傷つきをもたらしかねない対人状況を意図的に回避する行動に繋がるのが考えられる。ただし、友人に対する気遣いにおいては、たとえ孤独感が強くとも孤独を肯定的に解釈できる個人は、友人の反応にむやみに合わせたりせず、お互いを傷つけない距離感に執着しなですむことが示されていた。以上のことから、強い孤独感を持つことは対人場面における回避行動を促進しかねないが、孤独における解釈に積極的な意味を見出そうとする姿勢があれば、友人関係における遠慮や気遣いが軽減される可能性があると考えられる。

次に、対人ストレスにおける「対人摩擦」、「対人過失」、「対人葛藤」の3下位尺度では、孤独感を強く意識している個人ほど、ストレスとなる出来事に遭遇する機会が多いと認識されていることが示されていた。これも強い孤独感を持つがゆえに、友人関係に際して委縮を招いたり、場合によっては被害的な意識に至ることが考えられる。ただし「対人摩擦」では交互作用が有意傾向、「対人過失」、「対人葛藤」においては有意な交互作用が示されているように、孤独感を強く意識している個人であっても、孤独を否定的に捉えている場合よりも肯定的に捉えている場合のほうが、対人的な摩擦・過失・葛藤は相対的に低い水準に抑えられていた。つまり、同程度の強い孤独感に苛まれていたとしても、孤独を肯定的に解釈できるのであれば、友人とのつき合いによる疲弊も、友人に対する強い罪障感も、友人から軽視されている被害的意識も減弱できると考えられる。これらは、対人的な衝突を恐れながらも孤独を受容しようと奮闘する姿だとも考えられ、落合(1999)による孤独感類型のD型に見られる健康的な内閉状態に類するものと推測される。また、このような対人ストレスの低減現象には、友人関係を維持するなかで何らかの問題解決的な対処行動が効を奏していることが予測される。このように、孤独感の強さは友人との衝突に意識を向かわせてしまうが、孤独の捉え方次第では他者集団のなかで自分を見失わない態度に繋がり、彼らの発達課題である“自分さがし”の作業においても機能的に作用することが考えられた。

青年期は、自己イメージを肯定的に維持し続けたい反面、恥や失敗に対する恐怖感が増大する時期でもある。この「他者から認められたい」と「他者から批判される状況を避けたい」という両欲求による葛藤をコントロールするのは容易なことではない。そして、これは孤独感自体の扱いづらさにも関連するものである。ただし、孤独感を自在に操ることは困難だとしても、各個人が孤独をどう捉えるかの認識を変化させることは、比較的取り組みやすいことだと考えられる。例えば、強い孤独感に苛まれている青年を援助する際において、低減の難しい孤独感そのものをメインアプローチとするのではなく、本人の寂寥感のなかに隠された「結果的に他者のためになっていると考えられること」、あるいは「結果的に自分のためになっていると考えられること」に焦点を当て、本来付随しているはずの孤独の積極的意味を自ら内省できるように対応することは有効な方法だと思われる。いずれにしても、孤独を肯定的に眺められる度量の育成は、青年たちの成長に欠かせない、機能的な友人関係の保持や、“自分さがし”に専念できるエネルギーの醸成にも必要であるため、今後において

重要な視点を提供するものだと考えられる。

ただし、本研究において留意が必要なのは、孤独を肯定的に捉えるという意味が自己成長を導くための真摯的態度を指すのか、孤独な状況の打破を諦めて個人的な生活空間に逃げ込むことを指すのが明確ではない点にある。もし肯定的な捉え方の解釈が、自らの孤独に居直り、友人との交友関係を断絶していることの免罪符なのであれば、自己の成長を導く要素として機能するものとは考えにくくなる。そのため、今後は孤独を肯定的に捉えるという内包的意味をより明確にしてゆく必要があり、強い孤独感を持ちながら孤独を肯定的に解釈している個人の様々な心理的変数を詳細に把握してゆくことが求められる。また、実際の友人関係における相互作用量がどのくらい担保されているのかについても、併せて検討してゆく必要があるだろう。

【引用文献】

- 大東美穂子・岩元澄子 (2009). 青年の孤独に対する捉え方 —孤独感, 自己意識, 精神的健康, 自我同一性との関連— 久留米大学心理学研究, **8**, 75-84.
- 橋本 剛 (2005). 対人ストレス尺度の開発 静岡大学人文論集, **56**, 45-71.
- 伊藤美奈子 (1995). 孤独感類型の変化から見た個人志向性・社会志向性の発達過程 心理学研究, **66**, 10-15.
- 諸井克英 (1992). 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学人文論集, **42**, 23-51.
- Moustakas, C. E.(1961). *Loneliness*. Prentice-Hall.
- (ムスターカス, C.E. 飯鉢和子 (訳) (1977). 孤独 岩崎学術出版社)
- 落合良行 (1999). 孤独な心 —淋しい孤独感から明るい孤独感へ— サイエンス社
- 岡田 努 (2010). 青年期の友人関係と自己 —現代青年の友人認知と自己の発達— 世界思想社
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- Peplau,L.A., & Perlman, D. (1979). *Blueprint for a social psychological theory of loneliness*. In M.Cook & G.Wilson(Eds.) *Love and attraction* Oxford: Pergamon Press.pp101-110.
- Russel,D., Peplau,L.A., & Cutrona,C.E. (1980).The revised UCLA Loneliness scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 472-480.
- 清水健司 (2001). 青年期における対人恐怖心性と孤独感との関連 心理臨床学研究, **19**, 525-534.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2005). 青年期における対人恐怖心性と第2の分離個体化の関連について 心理臨床学研究, **23**, 579-590.

(2014年10月31日受理 12月3日掲載承認)

